

11. 鉾打の人々と御講

大 西 宏 和

- I. はじめに
- II. 鉾打地区の御講
- III. 三日講
- IV. 報恩講
- V. おわりに

I. は じ め に

能登地方は、蓮如上人とのつながりが深いという点、総持寺が存在しているという点、加賀の一向一揆勢力との結びつきなどから、浄土真宗、禅宗問わず、仏教が文化の大きなウェイトをしめるという特色を持ち、仏教が全国的にも色濃く根付いているといわれる地域である。特に浄土真宗に関しては、北陸は真宗王国と呼ばれるほどにその影響が強い。鉾打地区もご多分に漏れず仏教が盛んであり、その仏教文化の拠点は、鳥越の多羅山蓮光寺、河内の妙香山託因寺、西谷内の天龍山覚永寺、上畠の虫峰山正覚寺、古江の国分寺安泉寺（以下山号略）、以上五ヶ寺にすえられる。鉾打地区10の集落に対して、5つの寺院というのは、かなりその比率が高いと言え、その五ヶ寺は全てが真宗大谷派の寺院である。真宗大谷派は浄土真宗の一派であり、これから見ていく御講という仏教行事は、信仰心の維持と教団の経済基盤の維持を目的とする、蓮如上人が創始した宗教的かつ経済的な浄土真宗特有の行事である。本稿では、このような背景にある鉾打地区の御講を中心とした仏教行事に焦点を絞り、仏教文化という側面から鉾打の人々の文化を記述、考察していく。その過程として、II. では鉾打地区の御講をはじめとする仏教行事の概要を述べ、III. IV. ではその具体的な見聞に即して詳細を記述していく。集落ごとの御講に関しても記述できれば良かったが、それには調査に赴くことが出来なかったため、遺憾に思いつつも本稿では省略させていただくことを始めにことわっておく。

II. 鉾打地区の御講

御講の歴史的な意味合いは前述した通りであるが、その語義的な意味は、『広辞苑』第5版によると、「仏典を講義する法会」、「仏、菩薩、祖師などの徳を讃嘆する法会」などと記されている。これに対し鉾打での調査から得られた御講の意味は、さらに広義的なものであった。20～30年前にさかのぼると、御講は仏事に限らず、3～5人以上の人々が集い、食料や酒を持

ち寄ったり、お金を少しずつ出し合ったりして酒や飯を共にしようという際に、「講する」と言い、要するに御講とは元来、仲間内の親睦会や懇親会のことを意味する言葉でもあった。もちろん語義的、宗教的な本来の仏教的側面がなかったわけではないが、現代のような娯楽施設や機会がない時代においては、人々が集い、法業の後に食事や酒を共にする御講に、そのような社会的意味合いが付加され、人々に認識されていたのではないだろうか。また、寺の社会的な役割は、御講という言葉に見られる仏教的な、または娯楽的な側面だけではない。子供が集い、行儀作法を学ぶ場であったり、集会場ができる前は、寄り合いの場であったりもした。

このように、かつては村人の生活に極めて密接に関連していた寺であるが、学校という制度が整い、人々の経済的な水準が向上し、集会場という設備もできた現代の社会において、寺の果たしてきた機能は家庭や学校、集会場や、テレビをはじめとする多様なメディアなどに代替され、生活と寺との緊密な関係は薄れてきているといえよう。しかし、仏教行事として受け継がれている御講に関しては、昔からの親睦会、懇親会的な要素が、現在でもその内側には存在していると思われる。真宗行事である御講における宗教的な側面と、人々にとっての社会的な側面を検証していくうえで、まず鉦打にはどのような御講があるのか、という点から見ていく。

御講は大別して3種類に分類することができる。鉦打地区全体の御講、在所（集落）ごとの御講、寺ごとの御講の3つである。

1. 鉦打地区全体の御講

鉦打地区全体の御講、これはすなわち真宗大谷派能登教区第十四組鉦打小会の行事としての御講であり、相統講、大御講、御助成、御崇敬、そして御講とは少々性格が異なるが、鉦打地区全体の仏教行事として、花まつり、定例総会がこれに当てはまる。この種類の御講は、特別な用事がない限り、五ヶ寺の住職5人が全員集まっておつとめを行う。大御講、御助成、御崇敬、花まつり、定例総会の5つの行事の中心となる当番は、五ヶ寺がそれぞれ1年に1つ担当し、1年ごとにローテーションする。以下、比較的事務的な性格の強い、3月に行われる定例総会以外の行事について、記述しておく。

①相統講

鉦打地区では、毎月3日に行われることから三日講とも呼ばれるが、仏教行事としての正式な名称は相統講である。鉦打以外の地区では3日ではなく、他の日に行っている。相統講の名前の由来は、教えと門徒組織を相統していこうというこの御講の目的による。相統講は、正月である1月、農繁期である5月、9月には行われない。また、文化の日である11月3日は避け、11月2日に行われる。相統講に関しては、Ⅲ.で詳しく記述する。

②大御講

6月24日に行われる。性格としては、在所ごとに行われる御講が、その規模を鉦打地区全体に拡大したものであると言える。内容は、基本的に他の御講と同様に仏事が行われる。

③御助成

11月15日に行われる。元々は大火にみまわれた東本願寺再建のために、地方からお金を集めて贈ることを目的とした御講であったが、現在ではその名前のみが残り、従来と同様のおつとめが行われる。ただし、この御助成と3月の総会の時のみ、参加者の納めるロウソク代が200円ではなく、500円となる。

④御崇敬

1月20日から5日間行われる。御影様、越年^{おつねん}とも呼ばれる。その起源は江戸時代にまでさかのぼる。1778年の天明の大火によって灰となった東本願寺の再建のために、全国から駆けつけた大工をはじめとする多くの人々に対して、二十代達如は、地方へ戻っても信心を忘れずに、ということで、全国36カ所に、先代の乗如上人の絵と巻物を持ち帰らせた。この乗如上人の肖像を掲げしのぶ事を主眼とした御講が、御崇敬である。しかし、羽咋、鹿島の両郡を1枚の御影が廻るので、実物の御影に出会えるのは10年に1回位でしかない。

⑤花まつり

1956（昭和31）年に創始され、現在は5月の第3土曜日に行われる。旧暦4月8日は釈迦の生誕日であり、それにちなんだ行事である。仏教的な行事としては1年で最も大きなもので、町会議員をはじめとし、来賓の参加者も多く、鉾打地区あげての行事といえる。当日は、小学生の鼓笛隊に先導されて、張りぼての白い象がのる台車を引き、地区内を練り歩く。花まつりは仏教行事であるが、ここでは鉾打小学校の年間行事の1つとして定着している。仏教行事が学校行事になっているという点に疑問は感じられるが、それだけこの花まつりが仏教行事、宗教的な色彩を持つ行事というより、むしろ地域の行事としての性格が濃厚であることが伺われる。

2. 在所ごとの御講

寺院のある在所、鳥越、河内、西谷内、上畠、古江の5つは、それぞれの寺院がその在所の御講を担当するが、これに対して寺院のない在所は、御講御坊様というのが決められている。町屋は正覚寺と覚永寺、藤瀬は蓮光寺、北免田は正覚寺と蓮光寺である。大平は在所の御講を持たないが、御講御坊様は正覚寺と安泉寺である。別所は元々、行政単位が鉾打村ではなかったため、現在でも組織的には鉾打五ヶ寺の下に組み込まれてはおらず、富来町鶴野屋の安成寺が御講御坊様になっている。別所に関しては、組織的に他の在所とはカテゴリーが異なるだけであり、鉾打地区全体の御講、寺ごとの御講をはじめとする花まつりなどの鉾打地区における仏教行事への参加は、他の9つの在所同様に行っている。

地区ごとの御講は、10地区もあるので（実際にそれを行うのは9地区だが）、その全てを紹介することはできないが、その内のいくつかを例示しておく。鳥越^{なかの}の中野出御講、上手^{かみて}出御講、向側^{むこうがわ}御講、北免田の十日御講、十三日御講、河内の岩穴^{いわあな}御講、二口^{ふたぐち}出御講、石畑^{いしばたけ}御講、下^{しも}御講

などがある。これらの多くは他の在所の御講も含めて、2月にそのほとんどが集中する。というのも、2月は旧暦の正月であり、また農閑期でもあることに起因すると考えられる。また、いくつかの集落で見受けられる青年御講や尼御講（かか御講）も、分類としては集落ごとの御講に属す。青年御講というのは壮年団中心であり、1935（昭和10）年前後に開始された。その当初の目的は、お国のために役立つ立派な人間の育成であり、いわゆる戦時協力体制の一環であった。現在ではそのような趣旨はなくなっている。尼御講は、その起源は定かではないが、仏事に参加する機会が女性には殆どなかったのが、女性のための御講を行うというのがその始まりである。現在ではその基本コンセプトは薄れ、男性も参加していて、当初の目的というのは、その名前とイメージ程度にしか残存していない。尼御講は、御講に参加する人口の減少と逆行して、参加者の越境化が見受けられる、大変興味深い現象を如実に伴う仏教行事である。

3. 寺ごとの御講

寺ごとの御講に関しては、元旦の^{しゅしやうえ}修正会、農繁期の5月、9月、年の暮れの12月を除く毎月行われる二十八日講などもあるが、ここでは^{しどうきやう}祠堂経、^{こんごうえ}魂迎会、報恩講を中心に詳述していく。

①祠堂経

^{えいたいきやう}永代経とも呼ばれる仏事で、五ヶ寺がその期間をずらして行う。7月は正覚寺、8月は安泉寺、9月上旬に託因寺、下旬に覚永寺、そして10月に蓮光寺が行う。また、この期間以外にも行われる場合、それは^{べっけいかい}別経会と呼ばれる。御講とは性格を異にし、報恩講などは「もうす」と言うのに対して、祠堂経を「あげる」という。内容を簡略化して述べると、「自分の親や先祖を末永くこのお寺で供養して下さい」という意味を込めて、門徒の人々が懇志を持って寺を訪れ、寺側は先祖供養のためにお経をあげる、といったものである。人々は自分が門徒になっている寺以外にも2、3ヶ寺にお参りに行く。また、1年以内に死者の出た家の人は、葬式に住職を御招待した寺を全部訪れる。そのため祠堂経の日程が、人々の負担を重くしないようにずれているのである。その懇志といっても様々で、各家でいくらかの差異は見られるが、普通は3,000円から5,000円であり、1年以内に死者が出た家の人は、檀家寺には15万円から20万円、その他の葬式に来てもらった寺には1.5万円から3万円を包む。ちなみに檀家寺といっても、墓を寺に持っているということではなく、鉈打では、自分の土地に墓を持っているという家が多い。また、懇志が昔は米であったことは想像に難くない。

②魂迎会

金剛会、魂俱会などをはじめとし、様々な漢字表記があるが、鉈打では魂迎会というのが一般的である。主に結婚などで実家を離れ、他の寺の門徒である家に入った者が、元々自分が門徒であった寺へ参りに来るのが、この魂迎会である。特に実家の親が亡くなった際、多くの人はこの魂迎会に鉈打へ戻ってくる。現在、魂迎会は毎年11月23日に鉈打五ヶ寺全てが統一されている。この日は勤労感謝の日であり、鉈打へ戻る人に都合が良いこと、1年で最大の御講で

ある報恩講に近いことなどから11月23日になっている様である。このことにより、人々の意識にも変化が見られた。元々の意味合いに加え、現在では死者が出た家の人々が参るようになり、報恩講に近いことから報恩講に来る代わりに参りに来る人々もいる。つまり、現在の魂迎会は3種類の人々が集う仏教行事となっているのである。また、昔は米を2升持って参りに来ていたが、現在では参りに来る際、現金（金額は家によって差はあるが2,000円より）をお寺に納めている。

③報恩講

本来は蓮如上人の命日である11月28日まで7日間行われる、1年でも最大級の御講である。7日間行われるということからオシチャ、オヒッチャなどと呼ばれるが、その呼称にも関わらず鉦打地区では実際7日間行われることはなく、5日間もしくは3日間と短期化されている。鉦打地区のみならず、7日間行わない寺は能登地方にはかなり多いらしい。詳細はIV.で記述するので、ここではその概要を記しておく。

報恩講とは、親鸞上人の恩に報いるという意味であり、第3代の覚如が創始したと言われている。また、その親鸞上人の恩とは、その中心的なものとして、仏教を一般民衆の身近なものにしてくれたことへの恩が挙げられる。そして一口に報恩講と言っても、鉦打には3種類の報恩講がある。まずIV.で扱うような寺で行われる、お七夜と呼ばれる報恩講である。

2つめは冬の農閑期、具体的には1月から3月にかけて、住職が各門徒の家を廻っておつとめをする、まわり報恩講で、このまわり報恩講は、かつては各家で食事や酒の席などのもてなしがあったため1日1軒しかまわれなかったそうだが、現在はそういうことがあっても辞退し、1日に3、4軒はまわるようにしているそうだ。ちなみにこのまわり報恩講では1軒につき1万円位の志を包む。

3つめは、鉦打では託因寺のみでしか行われていないが、引き上げ報恩講と呼ばれるものである。引き上げ報恩講というのは正式には引上会いんじょうえと言われ、一般的には10月に3日間行われる。元来、本山から百里以内の寺はこの引上会を行い、11月28日に行われるいわゆる正規の報恩講の際には本山へ参ることになっていた。しかし、このきまりは決して厳格な性格のものではなく、百里という境界線も曖昧になっているし、近くても行っていない寺があれば、遠くても行っている寺もある。例えば、鉦打五ヵ寺の内4ヵ寺はこの引上会を行っていないが、田鶴浜など本山からさらに遠ざかった地域で引上会が見られることもある。また、引上会を行い、さらに11月の報恩講も自分の寺で行うことがあったり、託因寺のように、11月になると寒いからという理由で（それが本当の理由かどうかはさだかではないが）引上会を行うことがあったりする。以上、お七夜と呼ばれる報恩講、まわり報恩講、引き上げ報恩講の3種類が鉦打には存在している。

Ⅲ. 三 日 講

ここでは8月3日火曜日に古江のK家で行われた三日講の様子を中心に、鉦打の三日講について詳述していく。当日、我々が三日講の執り行われる会場となるお宅に到着したのは午前10時頃であった。ぼちぼち人が集まり、仏具が安泉寺より搬入されていたころであった。仏具は具足とも言われ、具体的には親鸞上人、蓮如上人、阿弥陀仏の3枚の掛け軸や、燭台、如来像、真宗大谷派能登教区第十四組鉦打小会と書かれた紫色の旗などである。床の間に3枚の掛け軸が掛けられ、その手前にはその他の具足が特に誰ということではなく、住職と人々の手によって配置された。また、紫色の旗は縁側に立てられた。

おつとめが開始されるまでの間、男性陣は仏事の行われる部屋で、いくつかのグループに分かれて世間話に花を咲かせる者、1人でタバコに火をつける者などそれぞれのんびりとした時間を過ごしていた。彼らの話の内容は、最近の天候であったり、農業の話、人の噂話や仏教行事のついでの話など様々であった。女性陣はというと、その隣の部屋で談笑する者、台所でお茶や茶菓子の準備や、御斎の準備をする者など、こちらもなにやら仲間内での楽しそうな一時を過ごしていた。お茶や御斎の準備は、会場となった家の女性と、当番になっている人が行う。この当番は順番で決まっているようだ。ただし、この日は夏の最中で、料理が傷むと大変なので仕出しを頼むという方法をとっていたので、御斎の準備に関しては、いつもの三日講より余裕があったのではないだろうか。彼女たちがこの日につくったのは、ご飯とおつゆ、漬け物といったものくらいであったが、材料は持ち寄りであるし、かかる経費は当番で分担して負担することになっているため、鉦打の女性にとってこの当番はあまり喜ばれていないというのが実情であるようだ。

この日の御講には、男性12人、女性7人、各寺から4人の住職が参加していた。いつもは五ヶ寺の住職5人が全員参加するとのことだが、この日は1人が用事で来られなかったらしい。三日講には五ヶ寺の住職が集うのだが、中心になっておつとめを進行させる役目の人は当番のように決まっていて、その順番にあたる人を調声^{ちょうしやう}と言い、その人だけは袈裟を来て三日講に臨む。そうこうしているうちに準備は整い、時間も頃合になった様で、住職達の「そろそろ始めますか」といった言葉で人々もそちらに注意を向け始めた。

仏具の配置された部屋に男性が陣取り、その隣の部屋に女性が陣取っておつとめは始まった。人々が集まってきた時から既に、ごく自然に仏事の際の男女の配置がなされていたわけだ。もっとも隣の部屋といっても、ふすまは全て取り払ってあったので、1つの大きな空間であったわけだが、仏具に近いところに男性が座るとするのは昔からの名残であろうか。また、儀式の最中もそうであったが、男性も女性も正座をしている人は少なく、仏教行事独特の厳粛な雰囲気はあったが、格別に改まったという感じは受けなかった。

儀式は勤行集86ページの真宗宗歌に始まり、次に正信偈^{しょうしんげ}が詠みあげられる。ここまでは、勤行集を見ながら、人によっては暗唱している人もちらほらいたが、ほぼ全員が口を動しながら儀式は進行した。この正信偈と法話は、あらゆる法座において必須の要素である。正信偈とは親鸞上人の創った「うた」であり、通常、一般の人々に「お経」として認識されているものはこれであるそうだ。正信偈が終わると、次に調声^{ていしょう}が御消息^{ごしよく}と呼ばれる2本の巻物を読み上げる。この巻物は赤と紫のもので、仏具と一緒に保管されていた。改悔文^{かいけいもん}がその後に詠まれ、5分程度の休憩がある。この休憩の間にロウソク代として、お参りに来ている人から200円ずつが徴収される。このロウソク代は、御講の運営維持費の一部となる。その後、法話があり、勤行集にある恩徳讃^{おんどくさん}をもって三日講のおつとめは幕を下ろした。

人々が幾分かの厳粛な空気から抜け出ると、事務的な連絡があり、元来3月に渡すものだが、まだもらってない人には同行^{どうぎょう}の委任状が配られた。同行とは簡単に言うと、当番よりも組織的な性格の世話役のことである。同行に関しては別稿で詳述してあるので、ここではこの程度の記述にとどめる。おつとめ、事務連絡等全てが終わると、最後に人々が協力して仏具一式の片づけが行われる。中には率先して片づけを仕切る名人もいて、住職達も顔まけだそうだ。こうして片づけられた仏具一式は、来月の三日講の会場となる家の人が持ち帰るか、最寄りの寺に保管され、また次の三日講の時に持ち出される。片づけと平行して御斎の準備が進められ、片づけが完了し、ほとんどの人が御斎の席に着く頃には、和やかな空気が家中に満ちていた。

IV. 報 恩 講

報恩講は、前述の通り3種類が鈍打は見られるが、ここでは11月末に行われるものについて記述していく。報恩講は満座と呼ばれる最終日の11月28日は午前中からのおつとめになるが、それまでのおつとめは毎日午後から行われる。まず11月26日金曜日の蓮光寺の報恩講から見ていく。

当日はあいにくの曇り空で、私が到着した午後2時頃にはもう人々がばらばらと集まっていた。来た人は受付係の人にロウソク代を納め、名前が記帳される。この受付係は基本的には門徒総代がやることになっているらしい。ロウソク代は、門徒の人は5,000円から7,000円、門徒以外の人は2,000円から3,000円が相場である。そして、ロウソク代を納めた人は、名前と納めた金額が紙に書かれ、御堂の方に張り出される。お寺の方が人々にそろそろおつとめを開始することを伝えに来たので、冬の寒さが身にしみる御堂の方へ、お参りに来た人々と一緒に私も移動した。鐘の音と共に報恩講のおつとめが開始される。この日は平日ということもあり、女性が10人、男性が5人という参加者であった。蓮光寺の報恩講は、住職と2人の僧侶の3人によって進められていった。30分程の正信偈が詠まれ、その後御文^{おふみ}が読まれる。正信偈も御文

も真宗大谷派勤行集に記されていて、それを見ている人が多かった。御文は、蓮如上人の言葉であり、毎日違うところが読まれている。次に御伝鈔^{ごでんしやう}が読まれる。御伝鈔とは、親鸞上人の人生絵図に対する絵解きであり、その人生絵図は上巻8枚、下巻7枚で、本尊の右手に飾られていた。御伝鈔は26日に上巻、27日に下巻と2日間に分けて読み上げられる。儀式は、法話、お焼香と進み、終了する。その後、男性数人は残って住職達とお茶を飲みながら話をしたりするが、人々はその大半が帰路につく。外はもう夕方、女性達にとっては夕食の準備の時間になっていた。

11月28日は日曜日であり、満座と呼ばれるこの報恩講最終日にはもってこいであった。この日私が覚永寺に到着したのは午前10時頃、ちょうど人々が集まり始めている時間であった。蓮光寺での報恩講の際もそうであったが、寺に来た人は門徒総代の所に行き、ロウソク代を納める。その後はおつとめが始まるまで、めいめいがお茶を飲みながら、挨拶をしたり世間話や昔話に花を咲かせたりしていた。この日はたくさんの人が来て、法座が満席になるという意味である「満座」にふさわしく、20人から30人近くの人数になっていた。大人数だったので、正確に把握することができなかったのだが、男性と女性では男性の方が多かった。また、これまで記述した御講全てに共通していることだが、一般的に若者と呼ばれるような世代からの参加はみられなかった。

例によって鐘がなり、正信偈から儀式は始まる。その後、改悔文、法話と続く。この一連のおつとめは、覚永寺住職の言葉通り、蓮光寺の報恩講と比較すると、同じ日のおつとめを見させて頂いたわけではないが、幾分時間も短く、簡略化されている様に思えた。具体的に述べると、蓮光寺では3人で行っていたため、次の手順へ進行する際に3人全員がそれぞれ座る位置を変えたり、2人になったりしてから経を読んでいたのだが、覚永寺では住職1人で行っていることもあって、さしたる位置的な動きも少なくおつとめが進行された。しかし、お経の読み方は、草四句目下げ、行四句目下げ、真四句目下げと大別して3種類あるらしいが、この日はもっともかたい感じの、形式張った読み方である真四句目下げで読んでいたようだ。覚永寺では、日常のおつとめは最もやわらかい感じの草四句目下げを用い、11月26、27日はその中間に位置する行四句目下げでお経を読むとのことであるが、この3種類の読み方をどのように用いているかというのは、各寺によって様々なようである。覚永寺で行われたこの日の報恩講で驚いたのは、法話にビデオを用いていたことであった。

ビデオの内容は、京都の東本願寺再建のために、木材を地方から運んだ際、たくさんの人々がその命を犠牲にし、大変な苦勞をしたという話を中心に構成したものであった。法話という堅苦しい感じがするが、このようなメディアを利用することで、その後に聞く法話を、話し手としても簡潔にまとめて伝達することが可能となるし、聞き手としても理解しやすくなるというメリットがある。私見になるが、伝統的な作法の価値は認めつつも、これもまた思い切っ

たいい方法ではないかと思う。

おつとめが終わると、御斎の場に一同が会す。酒を酌み交わし、食事をする人々はとても楽しそうであり、和やかな時間がその空間には流れていた。御斎の後、時刻にして午後3時近くになると、残っている女性達が作ったお鍋がもてなされる。これも覚永寺では毎年恒例らしく、15人近い人々が残り、お鍋を囲みながらお酒を飲み、談笑する。それは明らかに、II.の冒頭で述べたような鉦打の人々にとっての「講する」ということであった。御斎が終わって、帰る人もいれば、お鍋を食べてから帰る人もいるし、お鍋の後でいろりを囲んで夕方まで語らう人々も少なくなかった。こうして1年で最大の御講である報恩講の満座は終っていった。

V. お わ り に

鉦打地区における御講は、参加している人々にとっては「講する」という性格のものであり、また仏教行事であるという両義性があり、これはどちらの側面がより強いということではなく、かつてからの2つの意義がまさに一体となってこの行事が認識されている。また、世話をする立場の人々にとっては、当然この2つの意義があるが、特に「講する」という性格が大きい。三日講の当番は嫌がられているという声が多かったが、実際にそうであろうか。私の目には人が寄って何かをしていることが、楽しそうに見えた。誰も嫌な顔して動いている人はいなかったし、仲間内でお喋りなどしながら御斎の準備をしていた女性達にとっては、充実した時間がそこには少なからず存在していたのではないかと思う。経費や人手の負担は確かに引き受けるときにはやはり多少は難儀に感じるのだろうが、それ以上に充実した時間が得られているのではなかろうか。

さらに寺の立場からこの御講という行事を見ると、やはり前述の2つの意義がある。ただし、こちらはその見地からすれば当然ではあるが、仏教行事としての認識がやや強いように思われる。また、寺は後継者問題や参加者の高齢化（地区としての高齢化に伴うという面もあるが）などの様々な難題を抱えていて、近い未来における御講のあり方が危惧される。

最後に御講に参加していない青年、中年の人々に焦点を当てる。彼らが参加しないのは、平日の日中は仕事があるため参加しにくい、あるいは関心がないという要因が大きいと考えられる。現代社会においては、人々が幾度となく「講」してきた時代と違い、たくさんの娯楽が身近に用意されている。また、日常生活において仏教と触れる機会が極端に減少し、多忙ないわゆる現代人は仏教に目を向けるよりも、めまぐるしく変化する眼前の状況に対応だけで精一杯であり、若年層の宗教離れは日本全体の傾向といえる。その様な風潮の中で、今後、御講などの伝統的な仏教行事の維持がますます困難になっていくことは、火を見るより明らかである。

今回の調査で思ったことは、なによりも仏教行事である御講の「講する」という側面の美しさであった。その一方で、この心の荒んだ、人間関係が希薄になりつつある現代社会において、鉾打地区の御講に見られたような「講する」という温かい人間同士の輪は、我々にとってより一層かけがえのないものに見えてくる。鉾打の御講の中には、人々の充実した時間と伝統が存在し、それこそが都会の現代社会において必要でありながらも欠如している要素ではないだろうか。また、そうでありながらもそこに取り入れることが困難な性格を持っているのも「講する」ことの現代社会から見た1つの特質であることは否めない。だからこそ鉾打地区で、温かい御講がこれからも維持されていくことを私は切実に願う。